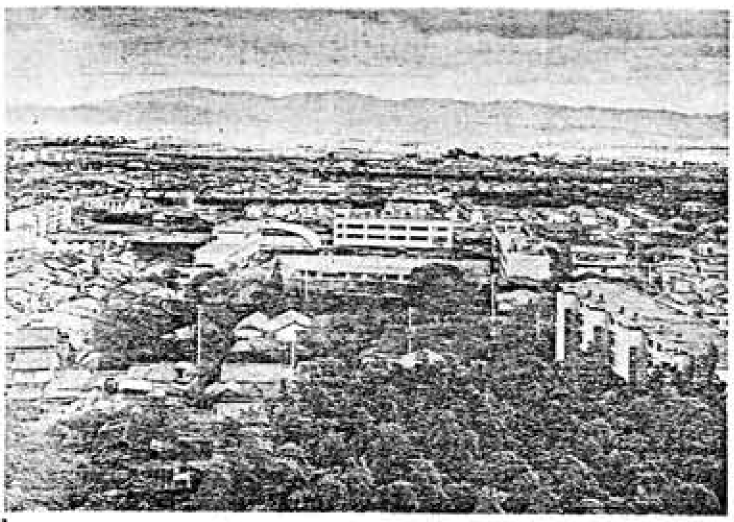

（庁舎屋上からのふかん）

新生向日市誕生を祝う
文化都市づくりを推進

待望久しい新生向日市が誕生しました。限りない未来を秘めた第一歩が、今日から始まろうとしています。

わたくしたちの向日市は、「緑と太陽にめぐまれた、豊かな文化都市」づくりを、住民のみなさんとともに推し進めていきたいと思います。

向日市は、京阪神を結ぶ重要な位置にあり、ますます飛躍発展する可能性をもち、また古い歴史をももっています。

これからも、さらに、明るい、豊かな、住みよい向日市の建設に住民のみなさんの、なお一層のご理解とご協力をお願いいたします。

市制記念寄稿作文集

＝小学生＝

市制施行を記念して、小学生の作文を掲載しました。

内容は、それぞれ明日の向日市に対する期待と願いがこめられています。

緑をたやさない市に

向陽小六年　森　彰子

わたしが産まれる前、わたしの家はこの向日町いや、向日市にこして来ました。わたしはよくおぼえていませんが、そのころは、チョウのめずらしいのや、ホタルなどが、いっぱい来ました。そのころは、にわの木や、道で、チョウがいっぱいとれたのです。でも向日市になる前でも、はい気ガスムンムンでなにかの工事で夜うるさくてねむれなかった日も、ありました。市になるということは、ますます発てんするということになります。

では、はい気ガスはなくなるでしょうか。工事でねむれない夜がなくなるでしょうか。庭に、鳥や、こん虫がやって来るでしょうか。せみがさんらんするでしょうか………。そして緑がのこるでしょうか。

わたしは小さい時から向日町に住んでいるからか、向日町が、大好きです。でも、わたしは、こう化学スモッグの出るような市には住みたくありません。そんな町ではいやです。でもわたしは、向日市以がいの所に住みたいとも思わないのです。市にはってんしてもいいけど、緑のなくなるのはいやです。はい気ガスになやまされるのもぜったいいやです。市は、はってんしてもいいけれど、緑をなくさないようにしてほしい。川もきれいにしてほしい。このいせきをのこしたきょう土も大切にしてほしい。市内にも、木をうえ、花をそだて、公園を作って市民のためにつくしてほしい。ただ名が町から市に変わるだけでなくなにもかも最初から、新しい向日市になってほしい。

他の市をまねるのでなくみんなが、向日市を手本にするくらい、わたしたち市民を大切にするような、すばらしい、すばらしい、向日市になってほしい。市民全体の手で作る、すばらしい市になってほしい………いつまでも、いつまでも………。

力をあわせて市づくりを

向陽小六年　池田　古隆

十二年間住んだ向日町はぼくのふるさとだ。いまは新築した家々が多く建っているが、ぼくが、小さかったころは、そこらは田んぼで、かえるが、たくさん鳴いていたのを覚えている。そして、昭和四十七年、十月一日に、向日市として、新しく出発すると聞いた時田んぼも、かえるの歌声もだんだん少なくなって行くのだなあと思った。まわりをみても競輪場は、設備が整って行くし、市民会館は完成が近い。また阪急の駅は、市の名にふさわしいようりっぱになっている。向日市、その未来は、どう発展するのだろうか。市の名がついても、今よりも大型車や、多くの車が、ぼくらの大切な道を走りまわったりしてはいけないと思う

毎日何回もきく、むねをつきさすいやな、パトカーなどのサイレンの音が町じゅう鳴りひびいてはいけないのではないだろうか。広い道路や車だけが通る道を早くつくってほしい。よその市へも便利にいけるようにしてほしい。向日町が市になるのだから、ぼくたちは町民から市民になるのだ

市民とよばれるとなんとなく大きい所に住んでいるようで、かっこいい。古くから住んでいる人、途中から住むようになった人、新しくうつってきた人、この人々が、手をくみ、わになって、みんなで力を合わせていこうではないか。公園も、自然を入れてほしいものだ。他の市から「向日市は、ものごっつうええ市やなあ。」といわれるぐらいにしようではないか。

公害のない静かな市に

第三向陽小六年　木村　一子

わたしは、向日町が、市になるなんてうれしい。なんか、向日市になって、これからどんどんさかえていくような気がするからだ。

しかし、向日町が市になって、どんどん、さかえていくのは、いいけど、反対に、公害という悪いやつがやってくるような気がする

だから、市になるっていったって、いままでのように、きれいな空気で、静かな市になってほしい。

それでいて、どんどん向日市は、さかえていってほしい。

それから、向日市は、他の市みたいに、車が多くてややこしいような市には、ならないでほしい。

むかしは、よいわたしたちのたこ上げ地だった田んぼも、いまでは、どんどん新しい家がたってきている

わたしの小さな時は、そんな家は、たっていなくてどこまでも、どこまでも、いねの穂が見わたせるようなところだった。

だから、あの広い、美しい田んぼは、家でうずめないでほしい。

このわたしたちが、安心して、住めるような、よい向日市になってほしい。

楽しい住みよい市がわたしの望み

第三向陽小六年　高山　博美

わたしは、向日市がこんな市になったらいいと思います。

『第一には、どこの市も人口が多く、こどもの遊び場所は、ほとんどない。だからこどもの遊び場所もある市になってほしい。』というのは、〇〇市で気のついたことです。学校も遠いし、公園といっても線路の下に小さなぶらんこなどがあるだけです。わたしの家は学校には近いけれど、野球をしているので遊ぶことができません。公園も少し遠いし、ちいさい子が遊んでいるので、わたしたちの遊ぶ場所がありません。それでわたしは、第一ののぞみとして書いたのです。

『第二には、ごたごたとした問題もなく、市民が清らかに、住める市になってほしい。』

これは、「市」というだけで、工場の問題、車の問題が多くなっています。それにこれからの向日市も、たくさんのれきしのあとのある所です。それを〇〇市のように、車の出すはいきガスなどで、日本に、数の少ない宝がこわれようとしています。だから、向日市が、こんなことで、長いれきしが、自然がこわされないように、と思い、第二ののぞみとして書きました。

ほかに、これといったことは、ありませんが、ただ一つだけあります。

『今までのように、市ということばにきにせず、楽しく明るい市になってほしいと思います。』

これからの市にとって、一番たいせつなことだと、わたしは思います。

人間の住みよい市づくりを

第二向陽小六年　福田ひとみ

十月一日は、第二向陽小学校の運動会です。そしてその日からわたしの所は、京都府向日市寺戸町西垣内十三の六十と変る。つまり向日町が向日市になる。わたしたちの住んでいる町が一歩また前進する。けれどそのことがほんとうに前進になるのかどうかわたしにはわからない。

わたしがひっこしして きたのは、四十三年の春、家が建つ前は、大きな田んぼで大きなさんしょの木がしげってたそうだ。そして四十三年の夏、うらの竹やぶで大文字を見た。月が光り大妙法船の火がともり最高であった。だが、河原町の方の店の電気がともりわたしは少しがっかりした。そして、四十五年に向日町に新役場が建てられた。四十六年に新郵便局ができ、第三小学校も生まれ、ニチイという商店がやってきて、銀行も多くできた。それにつれて、人口は多くなりその人たちの家を作るため竹やぶをこわし、畑がなくなり、静かな道も今はもう、競輪の日には車でいっぱいという状態になってしまった。はりこの池へにがしてやったかめの大ちゃん。父が拾ってきたかめのすえちゃんも二匹とも、にがしてやった。その方が幸せだと思ったからだ。でも今は心配になってきた。

わたしたちは、五年生の時過疎過密について勉強した。なぜそうなっていくのかという事もわかった。そして向日町の人口が急激にふえたことも、このことと関係があるということも知っている。自然をぎせいにしてふえた人口、自然をぎせいにして発展する町、もしそうなのだったらほんとうに悲しい。

向日町が進歩する。これはとてもいいことだと思う。だから賛成だ。

でも、犬をつれて歩いた竹やぶの道、自転車のさんぽ道、夜七時に竹やぶの真暗な道を一人で、きもだめしした道、はりこの教会、かにかまれながらやった虫取り、こんな楽しいことを残しながら、また人間に住みよい町へと発展していくことをわたしは望む。この願いは、無理なのかしら。

市になってとてもうれしい

第二向陽小四年　川勝伊智穂

ぼくは、向日市になるということをきいてよかったと思う。

なぜかというと、ぼくのいなかは亀岡市です。だから亀岡市といっしょで大きくなると思うとうれしく思います。

ぼくの学校は、向日市立第二向陽小学校になる。ぼくらもなにかりっぱになったような気がします。

学校もどうどうとした学校になると思います。

おとうさんは、

「亀岡といっしょで大きくなるなあ。」

とわらっていっておられます。

おかあさんは、

「向日町はこどもみたいで向日市になると、おとなになったね。」

といわれます。

ぼくもとってもうれしいです。

そしてぼくのねがいは、ほかの市よりもっと、もっとりっぱで、ものが安くなりみんななんでもやりたいことができる市になってほしいです。

もう一つこれはおねえちゃんの願いですが、中学校をもっとふやしてほしいということです。この向日町からだいぶきょりがあるので、小学校はかりにせず、中学校もふやしてほしいということです。

向日市のあゆみ

歴史のあけぼの　当市は往古約二千年にさかのぼる。新しい米作の技術が大陸から移入されて、生産が増進し、同時に池・溝の管理の必要などから、豪族が発生した。大和朝廷を中心とした強大な中央集権国家の権力者は、世界にも珍らしい大きな前方後円墳を物集女、寺戸の丘陵中に残した。

中古　奈良朝七十年の咲き匂う仏教文化の政策のさてつから、平安遷都の間に、わずか十年（西暦七八四〜七九四年）の長岡京の歴史は、空白の時代として、世人から忘れられ、大極殿跡碑といまなお残る大極殿、朝所、馬立、門戸、島坂などの地区が往時のなごりを留めるのみでしたが最近の学術調査によって、大極殿跡の礎石、土石などを続々発掘し、ようやく千年のヴェールを脱ぎ、日本の歴史のあゆみに解明を与えようとしている。

中世　鎌倉時代、班田制度は乱れ権力者中心の荘園制度となった。天皇家の願徳寺（宝菩提院）、藤原氏の小塩庄、猪熊庄、徳大寺家の鶏冠井庄、久我家の長岡庄、石清水家の寺戸、蝦手井庄など、皇族公卿の荘園が多かったため、永久の乱には官軍に味方して活躍した。後の応仁の乱では、西岡衆の活躍というのが史上有名になりますが、物集女、寺戸のひとびとが、物集女氏、野田氏らにひきいられて、山崎の社家、今里の能勢氏らと連合して、中央の足利、細川らとも連絡をとり、鶏冠井、勝竜寺、上思、井ノ内勢と相争い、天下の動乱の渦中にあった。

近世　徳川時代になると、京都の近郊として京都所司代の管轄下に入り宮家、公卿、社寺の領地となり、向日町、物集女村、寺戸村、西土川村、白井村、鶏冠井村上植野村にわかれ、乙訓地区の経済の中心地となった。

現在　明治五年五月、乙訓を四十四村にわけ、向日市は第一区に編入された。明治十二年十二月に町村議会が認められ、町村の予算を定めることができるようになった。また、戸長の公選主義も認められた。

明治二十二年四月一日に市制町村制が実施され向日町、物集女村、寺戸村、森本村、鶏冠井村、上植野村が合併し、向日町が誕生、それ以来八十有余年昭和四十七年十月一日に向日市となった。西に西山連峰を臨み、東は清流桂川のほとり、なだらかな竹林の丘陵に抱かれた市も、昭和三年新京阪鉄道の開通とともに住宅地として発展してきたが、とくに昭和二十五年以降、公共住宅の建設と府営競輪場の設置、電鉄会社や住宅会社の分譲住宅、工場建設などで都市化の様相をみせ、いまなお急速に発展をつづけ、田園住宅都市を形づくっている。

位置と地勢

当市は、京都府の東南部にあり、地形は西部一帯は南北に細長く、標高三十五〜八十メートルの丘陵が横たわり、市の中央部は住宅街を形成し、東部は平坦にして耕地が多い。東部に交通網が集中して、東海道本線、東海道新幹線、京阪神急行電鉄、名神高速自動車道路、国道一七一号線が通り、東洋一のマンモス操車場・国鉄向日町運転所がある。

また、地質は第三紀洪父古生層、礫質壌土（一部粘質壌土）である。気候は、おおむね温和であり、京都市内の盆地気候よりもしのぎ易い。